增補戲子名所圖會 上

チ 13
4024
1

門チ18
號4124
冊1

幽亭馬琴先生編輯
歌川豐國大人畫圖
浦島奇談

やくもやめい〜ふ づかい

源氏書肆 華本文昌堂
柏原氏 弘堂 梓版

大學圖書館
25.3.3
購入

自叙

太極静まりてこの方。天は三光の観相あり。地は三形の絶景多し。遠は潢土を交わしいたる。須磨明石乃月新たに引窓より漏るか新く吉野龍田の紅葉を錦樹よりにすしき。口か一杯の麦飯を啖ひ。足か三合の肉刺を端出し。幸ひ山川か好みを いふとも。鳴嘩それ何の益あらん。近く己を求まバ。新は眼鼻の名所なり。脊に七九の灸跡あり。鯛乃急変ハ庵丁家か祢せ。菌乃名不ハ葛西かるし。

奇人ハ若かゝ名不を知り。偏月ハ五ちゝら月医者を知る。巨燵無要門の犬。尾をあり丸ハ雙六ならで京へしるふらざるハ。痿痺ハ芳るの識ハ者ハ五然ハ八方を辯じ。安然とし〻四海ハ好ふれ皆書画の功なり。こゝを汲く近ころ世ハ移り都名所圖會に倣ふて。戯子名不写真三本を繪る。而猶盲目の揚書ハ人ハ蛇か怖ざる田夫山妻。じ必ふ此書を熟覧し。ハ〻して後戯場か移ゞ。彼一番叟ハ人ハ梅ならんハ祢。よて猶のハ

素人落を後ふせぐ。京川豊國が筆紙備く賣物ふ
花を飾り。ちらも招牌よ仍ち紀。鶴屋が本鄽ハ正戯
廂ま投じく。一番京気をうる事にかん。

寛政十二年庚申孟春採筆於飯顆
山草堂

曲亭馬琴

戯子名所圖會巻之一目録

三座臺濫觴

勘三樓興基
櫓山
三座舞臺
鞠出島　丈广鷲祠
桟敷ヶ嶽
雛子町
中二界　三階松
番附神
市村竹城之訳
鼠木道
大臣柱松
土間内海　大首沼　歩橋
鞴桟敷ヶ嶽
稲荷町
狂言之山
芝井碑
森田神宮之傳
留場仕切場開
羅漢堂
切落札辻子
樂屋洞
頭鳥部谷
新浄瑠理坂

曲亭馬琴子編

凡例

一 此書ハ三句欄戲棚山棚戲房ようけじめて。梨園子弟當時名高き山川草木を撰び出し。且画圖紙摸写して其風藝の仮しを。今古況ともべきれ狂奇殺白なられバ。悪其情を挙出せり。その余俳人の名を記ざるものハ皆撰者慢の怠惰なるべし。

一 俳諧ハ猶孔しく次第多くがめく。又おのづから活潑あるふ仇くり将技なきまゝ流の子弟ハ。直ふ老俳優の後を形ふ与むるとあるを。已富士を畫ふ孫山を添る類ひとり。其俗のふ家。陰俗あ〜ざるを以て咸ハ載せず。畢竟ふ風流なくして。図画の功あ〜ざれハなり。

一 近ごろ名の俳優といへども。今退廃ちくその迹なく。又あるとハいへども。その名のいまふ没へざるものをぶきて不載。所謂秀鶴寺。十町瞬のごひもり。然十字街鳥の中洛ハいぎふ地ふしく風流京きくのいへども全く古況の餘波なるがゆゑふ書よ出せり是名所と号るの大意なり。

一 此書ふ洩れる當場ろ俳優をくみ〜ど。菊三川。菊之の術。魚楽村。雷介杜演。藏川。蟠風。吾其外許多の諸名所も。拙く後篇ふ出づりく寔ふ洩せり。あるいこ洩れるをもて拙しとなるとなれ。初編ハ上中下乃三

幕ふ仰ぐ。已ことをはぢ二艶阪の後篇ふのこせり。

一

六代目市川三弁主ハ。去年五月十三日物故ととゝへどと。此地ハ東都俳優当一の名ふとゝひ。旦三弁寺世を早うせりと。ちゝ白猿隠居を中の巻のとゞめに出せり。猶七代目ふ続の縁紀ハ。後篇ふ書載そべし。

一

捻くの名所去載去より秋ちゞくの風景を活せるふ面ふ。艶阪よゝうてゝ世ゝづれ名猪をあらん猶。やあとら川の閑淑。いさらのかゝりゆありとと。故を淫く新ゝしきを知るもれハ世書ふ。戯子ふ益の

名所圖會なり。彼一年限の評判記とハ同じうゞ。

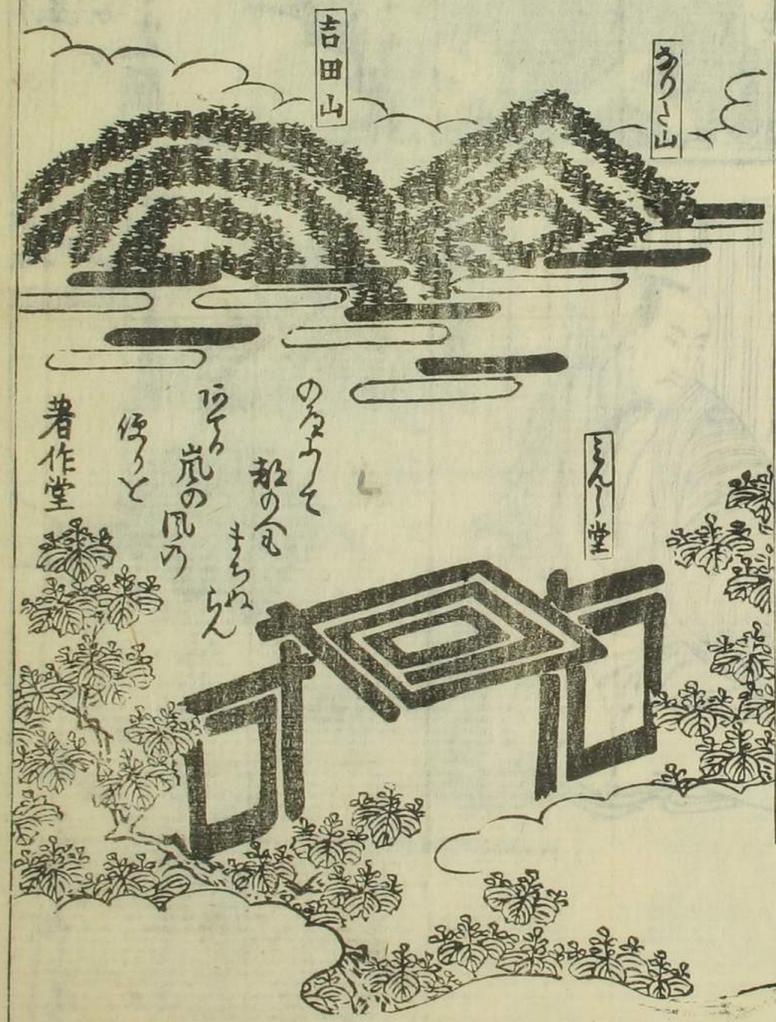
一

本朝俳優の名。神代の巻ふ生くゝ。その由て来ること久。或ハ大古俳優伝仮ゝ猶ゝるものハ。今の戯場のとうゝあゝぞゝいふ統あれどゝも。爭ゝその源ふ考てゝ。ゝ下流を汲むものあゝんや。文治のむゝし白拍子ふ猶せ女樂。ゝふ戯子のたゞひなり。今の戯場ハ永禄乃ちゝ名古屋山左衛門とゝふ者をしめゝう。又唐土漢魏六朝より。樂府と補ゝ紀ゝ。ゝふ。絃歌舞ゝふ同じうゞ。ゝゝあゝ。ゝゝ奉邱の白拍子が。朗詠ふ合せゝ舞ゝふ同じうゞべし。唐玄宗皇帝の時。伶奇院

本とて院本の鼻祖とも云ふべし。全備の風姿を宋の五花爨弄の舞より起りて。そのかたちは元明ふるくして。勾欄戲子とつくるものなり。且小旦生丑。両脚。浪子。步譁。妙口技ふ至りて。その形勢本邦のつくりものなり。夫花鳥風月八佰客人向ぢ千山百川女児の目を驚しくるし。只戲場のみ雅俗とくらべ。老若とくらべ。贊を爲じ樂を追ふるの佳境。風流第一の名所なり。

戲子名所圖會增補之巻

眠獅堂風景之圖



和の心もちて
嵐の風の
作ると
著作堂

眠獅堂
雛市之圖

眠獅堂　獅子ハ百獸の王。眠獅ハ俳優の魁首。尚石ら
小夜嵐三衛法師乃開基にして。既ニ七代に及ぶとや。本堂ハ
京坂の親玉如来。京浪速の老若拳く信仰奇依せり。堺
内三郎よりして度く。小六浦の古迹。扇のまと呂しば
京寺の水にして。見る人目を驚ませるとかり。其
風趣乃奇〳〵妙〳〵なる人のまる面白べ。
載せば。今の眠獅堂ハ。丙辰の年三月より二
代の名石なり。遂ニ親の光りをうけてしてて
人示ふるに試浮を。こしば去りし赤の水。藝堂
建立乃ふる東郎より。先人受授の玉と指く浮

の親玉ニ海。その除先を拭く信人恵授の守を弘む。
こゝに於て江戸子忽ち見賞合仰の却りひとなり。
叶の字所を寄附して三拝の門を建立せ。信く成田山
の眠獅堂と呼び做せり。堺内小四季の雛市あり。云
迚の桟敷十間店をうち通し。日くこゝ小がゝ賑
を六歌仙に五右つゞ東第姿の雛人形ハ。五人相揃入
りて。採小傍の金ゝ紙ハ五人雛子のこゝやしかゝみよろ
しく。本義ぶ巻物屏。世ゝつゞ節算笠。伴左つゞ上下菖
蒲ニ。ぎゝ三り結る物云の世ゝ。ゝり雛助乃ゝ揃。
一体立ゝ高上ゝ徳ゝ門狸雛助ハ。

寶悪一對の立てあるうと。早く眠獅堂堺門の名物

人事小り　　蕉夫

撫夫あり傷あり花れ六歌仙　　蕉夫

賞やや雛屋の奥り高言嘯　　羅文

一寛政十二庚申年三月廿日野崎観音の古道ありて

同年三月芫日岩井山壮若堂古道ありて

一同年八月より森田体庵て地を神とあり。ひろ京橋再び迁

坐の縁起ホ。迁て傍補う部に加入ていい

一新ひり改名の役者ホ有ら帝ハ年ら傍補ひてぷり出し

中なる。お智ら〜ぐ浄来は絶えずホ

板元　　仙鶴堂

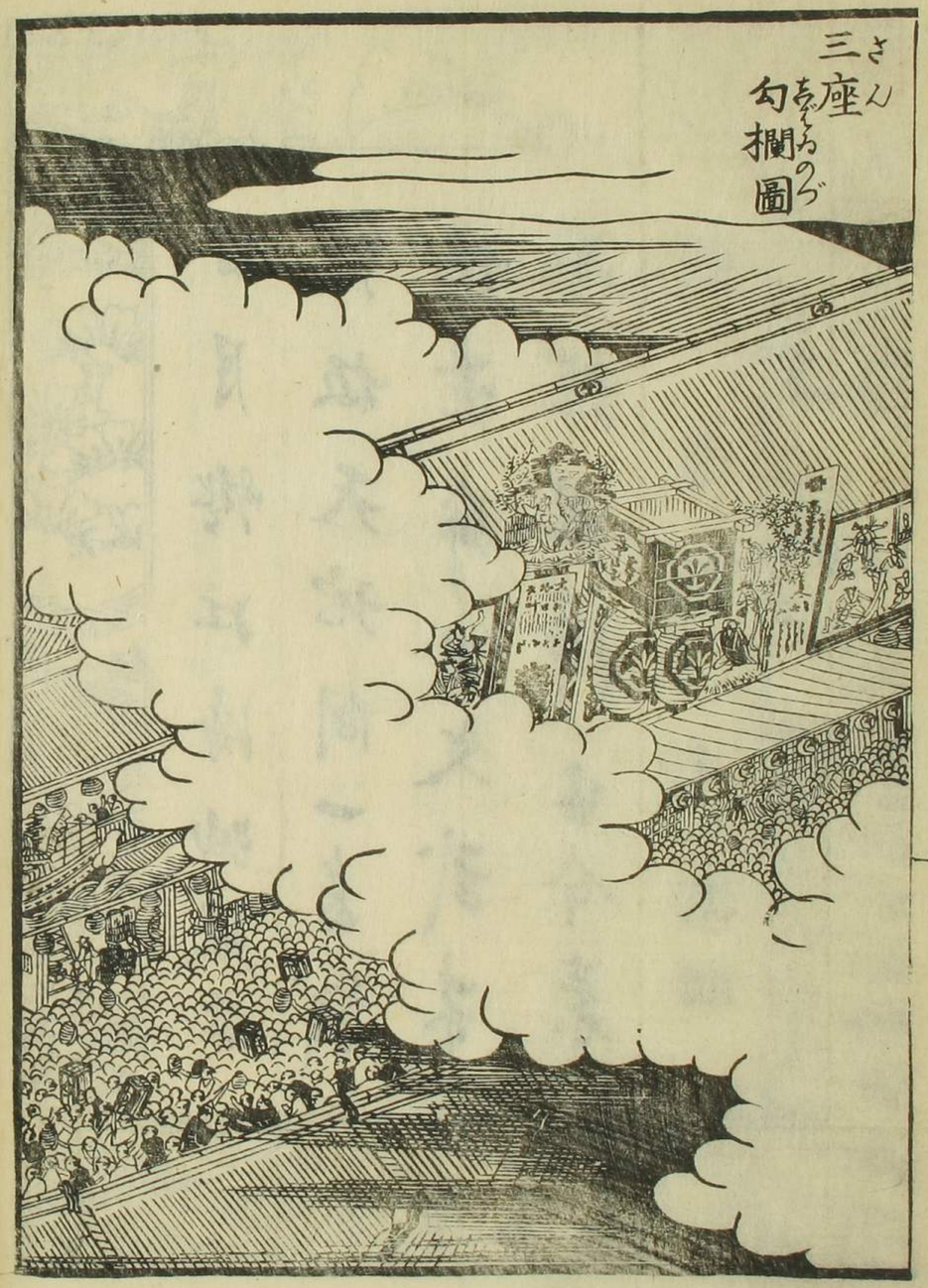
日月燈　江海油風雷

鼓板天地間一書戦

場変舞且文武未

斧操丑淳古今来

斜角脚　毛


三座のつゞ
勾欄圖

来くみの
櫓よ
上げき
あし
駒
そこむ
所を
揉ね
紙

ぐゃーんうちのづ
戯房後門圖

三徑秋花裏
露新
重携酒伴
過城圍
只應夜夜西
江月
留照筵前舊舞
人

朱彝尊

芝居三座の臺一ツの所の神。本朝神樂の宮初天鈿女命火酢芹命曼我大明神ゐして。今ハ生日人物はあれ屋とあれり。曼我の図ハこの巻に

おせり　芝居と名づくるハ或書ハ云むし　南都南禅堂の茶乃

芝ゐに三株の茶生ゆ。形土茶ハ似れバとてこれを粕云づく

と名づく。又弱茶千載艸と呼ぶ。是三番草の權輿なり。後世名古屋

山三とつふれ。此茶を小野小槌うり。後四条河原ゆうれもある時

この茶ゐ忽ち嶽く三ツの井戸となる。水源東方ゆ流れく来ぶ

隆ゆう。是江戸三芝井ハ起ゐるべし。人来りくこれを汲

見るこゝハ憂を拂ひ福を招く。熱を追ひ樂ゆ後を遂ふ命

の洗濯をいとなゝ。

金銭を投ぜれば泉忽ち涌出る。後ゆ此夫ハ此井の中を祝くゐ

と許ゆを是を汲く後世俳優の名ゆ水ゆかゝどる。市川

澤川沢村小佐川佐野川中村あり。又第壹ゆ楷うをあり。

皆此徳ゆ今ハ芝井を芝居ゆ書習ふ。是宝の緒統著ぶ

杜選なり。明く伝ぶべし。

勘三樓　開山猿若道作老人寛永元甲子年二月十五日當山を

冥基ゐて一ツの樓臺を建立ゐ。これを猿若の勘三樓と號を。

三株の神木ゆ。その樹を株木とつふ。今ハ茶株ゆ出雲の勅を

巫女。お國ゆ寄をの名木ゆ。勅三樓の株木ハ形紹者のぬく。樹樓ゆ

似ゆ。伝くその不乃名を坂紹者と呼ぶ。禁ゆ中村とつふ

村ありこの村に二代目の明石といふ奇石あり。今は麾猿若の衣裳業。
翠簾の総角新發意れ太鼓に當所の霊宝なり。元祖猿若建立
のそじめ、寛永元年より今寛政十二年まで凡百七十七ねん。
華堂院冠子名人より終焉に相續しく。今既に九代に
及べり。

昭級の鶴も千とせを濡そて汐の幕引猿との浦　巳克亭　雛忠

芝居もそふのしや舞妓の紐柳も　其角

竹之城門世にこれを橘の門といふ寛永十一甲戌年。村山といふ者を初
祭て市村の梵城を造る城門を羽左衛門と号す。今ハ門ぐらう
お續して城の沙汰なし。神木の株木橋より好きやる

といふ鳥此樹に栖くぶれやらふくと啼る後地名となりて好きやるれ
市村と呼做せり。好きやると名ぞらるゝといへる中にこゝを鎮ふ由あるに
吹矢を居へ又一説に此道の栽居を當寺なりまで冨貴やとふぞ
よし。方底の蓋物語に見へたり。幕の帳道具建の美具足
猿ハ此村よりはじまると也。文街道下といふ初文當所の什物く。
寛永十二年別當村山某創のそじめより今寛政十二年まで凡百
六十七年何江院家橘名人々の名世に高く去て。今十代お續を。

橘ハ実の人葉の人その葉あれ母ましく紅葉　傀儡子

れやくし子をまゐりけり　竹　こゝ迎　宗因

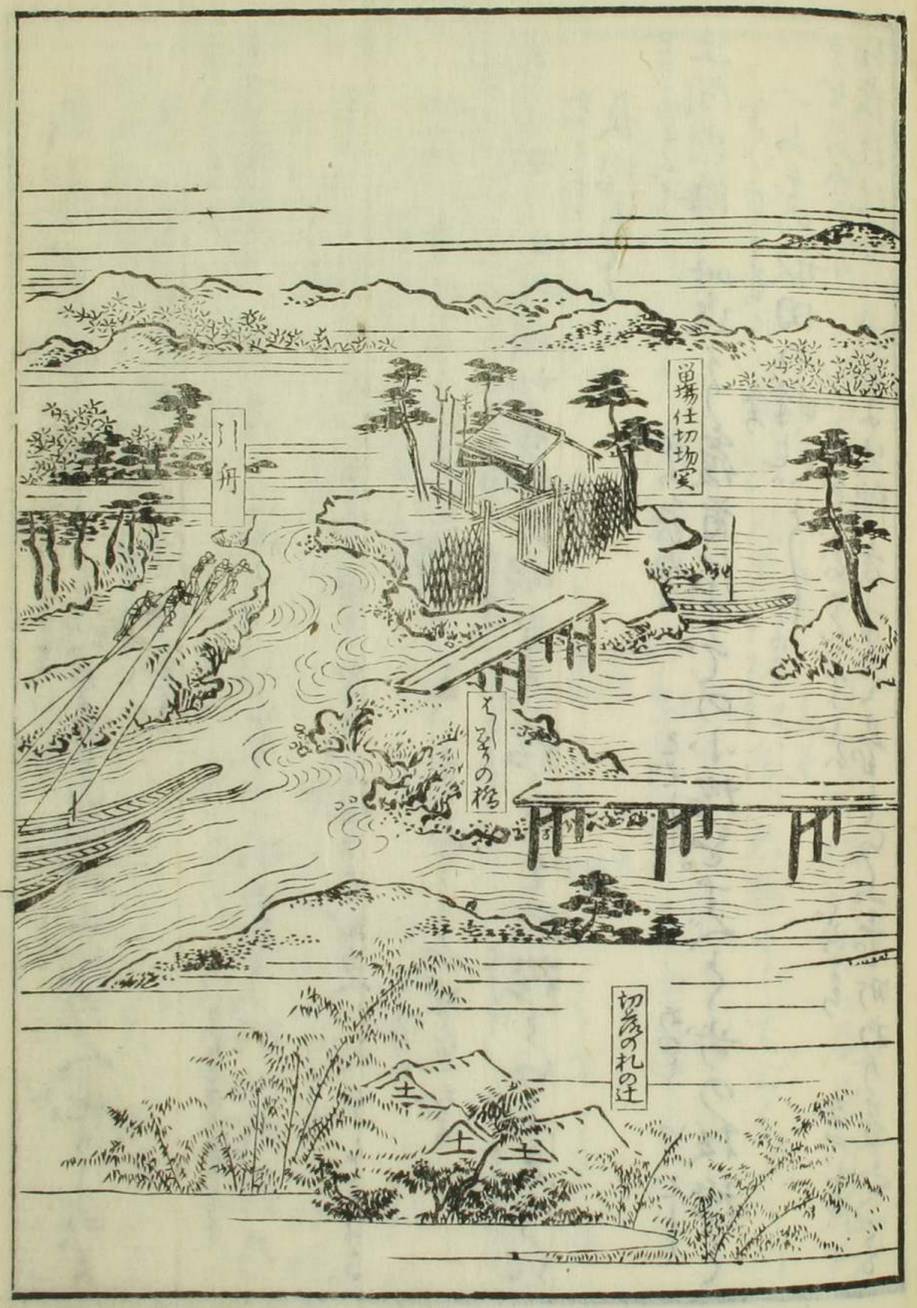
森田神宮今ハ中畧してうんやといふ万治三庚子にし。太郎左衛といふもの。

龍鐘莫レ怪撙前ムコト
客
子弟梨園皆白
頭
朱竹地老人

ふ思後の霊爰かよりて此祠を建立して一つの仏舎利を敬の
狂言堂か安置せり。神木の株木弘誓の墓を似て。此樹をと
こゝに紀名といふ鳥栖く。常夕鳴きやみの如し。此名人を嬌く
来ることを求る名か嬌来名と名づけし故ゆゑ名づけるべし。
勅を杜光残害賀尉より。今の根元ふくりて孫ふ九代。万治
三年より。今寛政十二年に凡百四十二年か盛べり。
縄のめぐらし建し本殿所桧舞臺のかんゆるし幕　雞忠
檜山　この山三所あり。山の勢四角ゆゑ雲の幕を掌り。
嵐十道　うしろ八縄張周夜坂やう。此道ふ所ゆ人ゆる立ちくふ
古ゝ雲か来ふ戸数とふ多ありて。切まで〳〵十六文くと帰。この家く

川越多し。此不の風俗人の名を喚ぶ只羽織袴合羽さんといつて。
その形を似く人の名ともるとなり。是俗さん坤さんの
類あり。扨く行鄙か古云の遺ることこれふく知れり。
留場仕切場関　嵐木道の狭か有。切先れ名なりの此関を越ぶ。
三座舞臺　西ふこれを本舞臺といふ傍よ大臣柱の松あり。此
松ふ後の古木あく。時よりて梅となることなり。桜となる
ともあり。江西の樹でふ名ぐの樹か変る吉今毛号有の名也。
羅漢堂　大臣柱より西のゑ。みゝ〳〵こゝく少ゑ紀不ふなり。祇爰
去換者土間でと換者といふ多の利加遠。此不よ安置せり。
糶出浮沼　此道ふ門名ゑの東なり。むゝ〳〵正徳乃こゝろ。樋は半右

えざ三座ぶゝ戯宿ふゝけの風景圖づ



染つとふもの作り出しる島なりとふ。山土地の人地を掘く
生くあり。古今稀なる深沼なり。

文麿就の言　舞屋の正面小しこなる所あり。形也焜窯乃
ごく。社家なとこへ多ち屋となり。屋なとなり人は殊外とちる。
此辺に幕梨子と云ふ梨樹あり。あぐ目まぐしく風京なり。
花道畷　出羽國切幕郡の畷なり。塚のもの塔なりと名高紀
長塔あり。

土間内海　此辺より長崎沿までの小塔をすべて歩の板塔し
いふ。その秋田の時はなどとし。
切落れ辻子　山下より大縄屋まで長崎町あり。長崎と

小高ど暑。元禄年より。堂下土月を密相小似る尾長名花あ
り。多田の陸沼の陸沼松風の名所なりて。ごくごくの
清水某灌のより流れ。その名第七如。西小中成田と云ハ此辺。

布子　長くより黒しし　桃乃くるる　くれ

撫敷ヶ嶽　この山は雪ととふ花りそもの名所なり。第八岩あら
べる席のめく。石葉ハかけ。ちくしたる毛氈小似る。下ハ新れ
名所なり。西川東川とふ両流れあり。平田翠屋なとふ浜蛇
の名人。七八間打投しとの大体の的石なり。ヶ三塔なりぶ。
聾撫岳　高山なり。いろる耳のちき人も。此山へ登れバ只はたぐ
ばり又へく。吉多文ふ山。叔小海の名あり。二月社日ハ酒を飲

く。山へ登まゞ文ゆるし。石林詩絵ふ又こゝろ。此ちふ〻舟多〜。

樂屋洞　舞臺の浦ゝ摠名あり。幕の内乃々鏡。その外又不多し。

嚙子街衢　そくそのうく不なり。不死林とゝふ林の中ふ河唄

井といふ名水あり。このみを飲ゞ声の立てるの屁ゝ速効。

三味山鼓ゞ瀧。苗場。大鼓岩。ゝゝふ名所多〜。

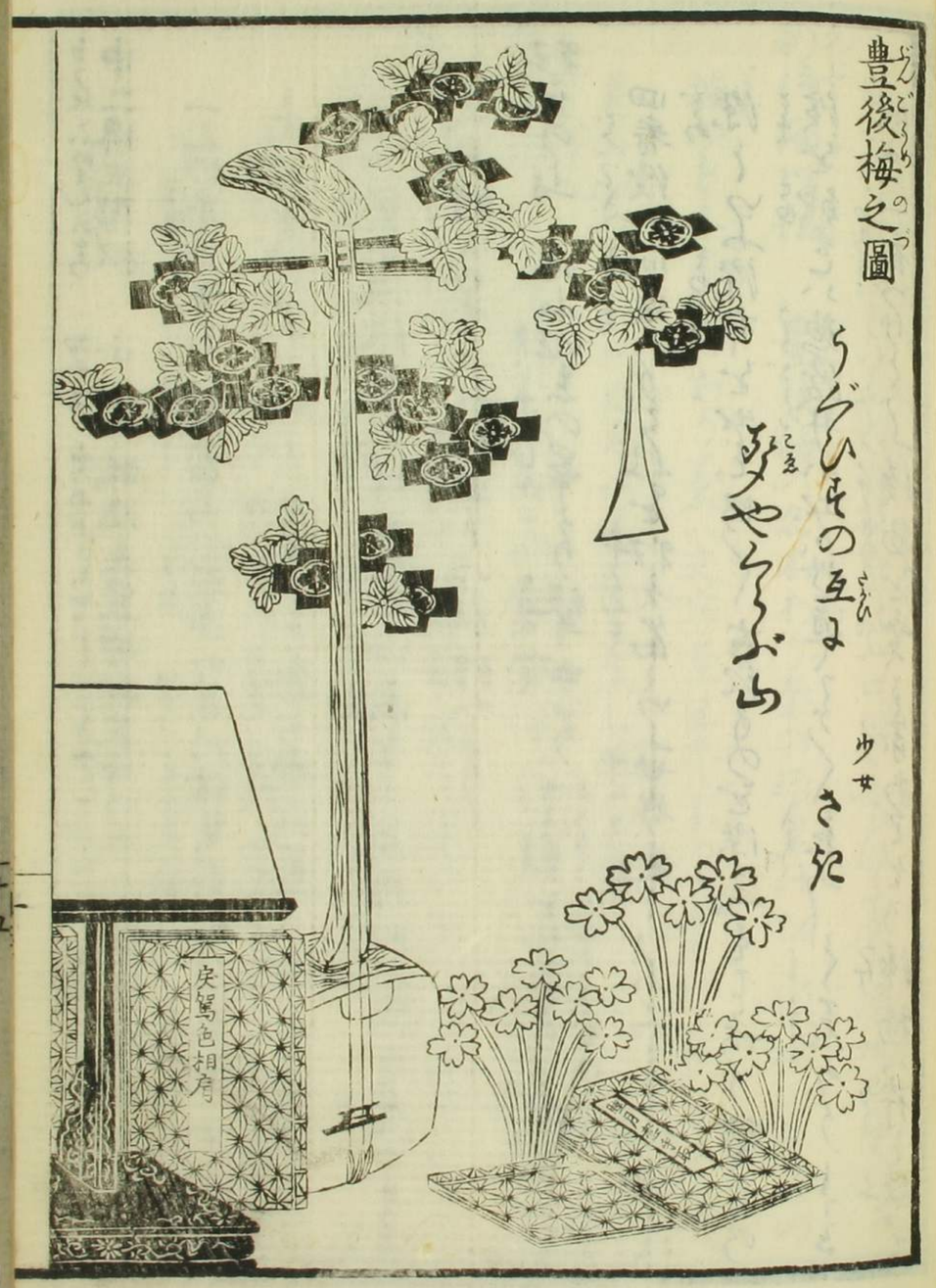
稲荷街衢　平輩天皇の陵八番附ふのゝぞの森ゝ中ふひなくく。紫

ゝり花牡丹といふ原へ出ゝゝり。

頭白紙谷　此谷小ゝ紙不ふり。粒云ふ和紙の小初ゝ。ゝゝ

ゝゝ社料とゝく。義衣庄一ヶ処を所ゝる。神体八所ゝゝゝ

老ゝを行ゝ〜ゝひ侍ふ。この谷ゝり紙を出ゝ。



豊後梅之圖

うぐひすの互よ

夢やゝぶ山

少さ

中二堺三階松　小山の城跡立葉師敵薬師の半堂縁起蒔絵ハ山くく

一之の巻ふ出ず。抑當所ハ多羅の井れ休足所みしく。或ハ女と変じ

て。あるひハ男と化し。老くるを忘ち嫩ゼ若ゝ都て白髪をくし

ぶく。実ふ風流の叢澤。老の仙嵐なり。三階松ハつを老せぬを

くぢ。特よりぞく死仙ホとつひ伝へくり

牡丹の山　此山北方の峯より繰出す。

四番続の間道あり。これを牡丹篇といふ世界定といふ所を此深渓

深としつ深布を出を。ゆく〳〵古紀ものを深くをとをかり。穏古の

渓を越もハ勢渡井ふ出る。此道しるく急みしく。危ふ〳〵しる

時よハ一夜づけとふ漬物を賣る家あり。その漬物ハ芹と麩て。

世ふ芹麩漬といふく。口技都れ一口づ〻ゆ〻ひ〻ぶる漬物なり。

新保猫理坂　豊後梅の名木あり。秦の始皇れ松と同格なくこの

梅ホを大夫の名あり。葉ハ文字葉冨本葉の二葉にとれて生長

もり。山坂ふ羽川名見渡峯沢といふ三筋れ流ふ三筋れ流ふ跨ぬり。

番附神　三座楷下ふ出る神芹ゑ神体ハ今日が初日蛇といふ蛇身ゑと云。

芝井礫　此碑碣ハ芸言羽院れ御宇貞頁連中先生の述るふるり。

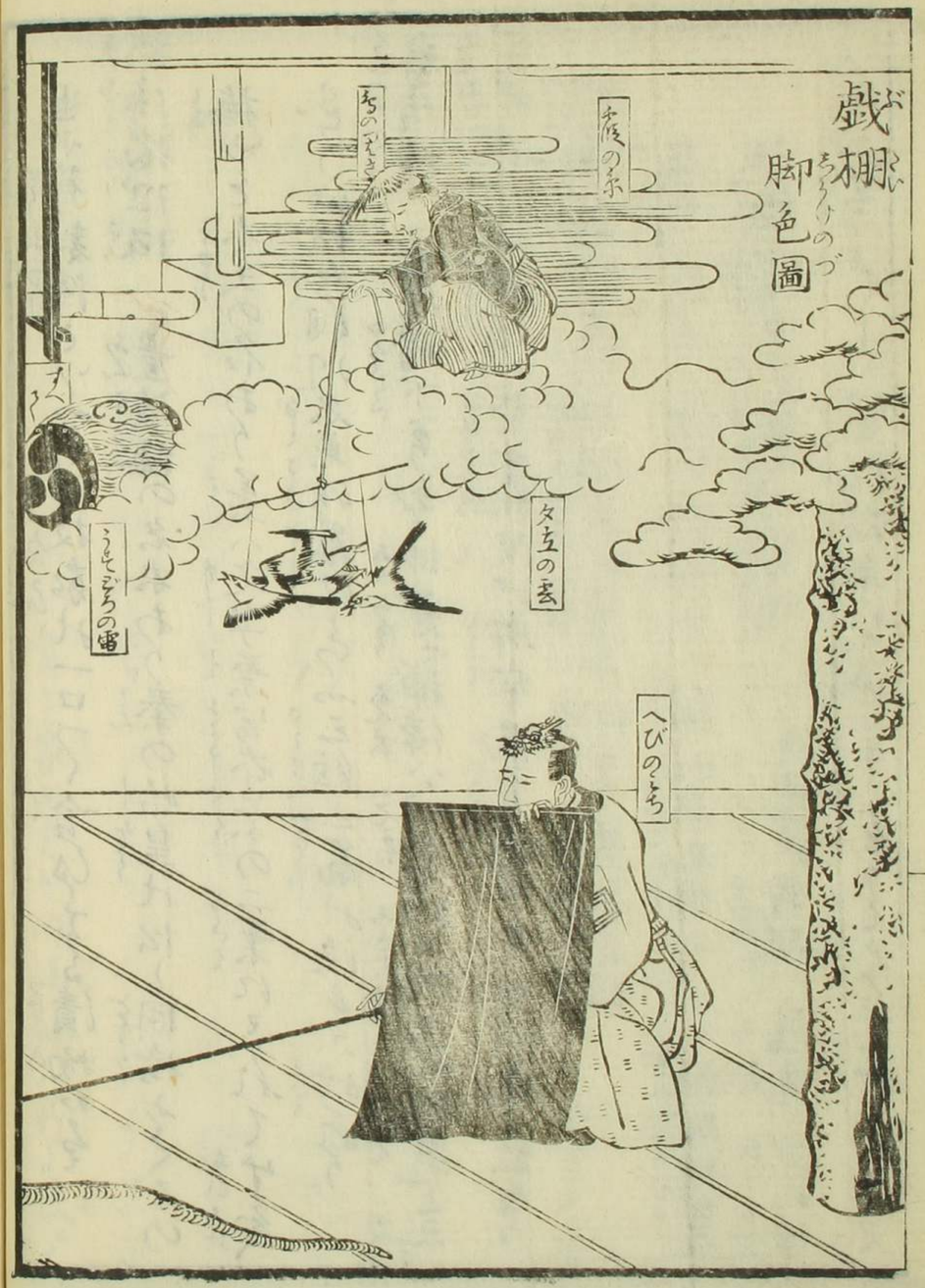
歌編笠れとく。井垣扇の骨ふ似るり其文ゑ曰

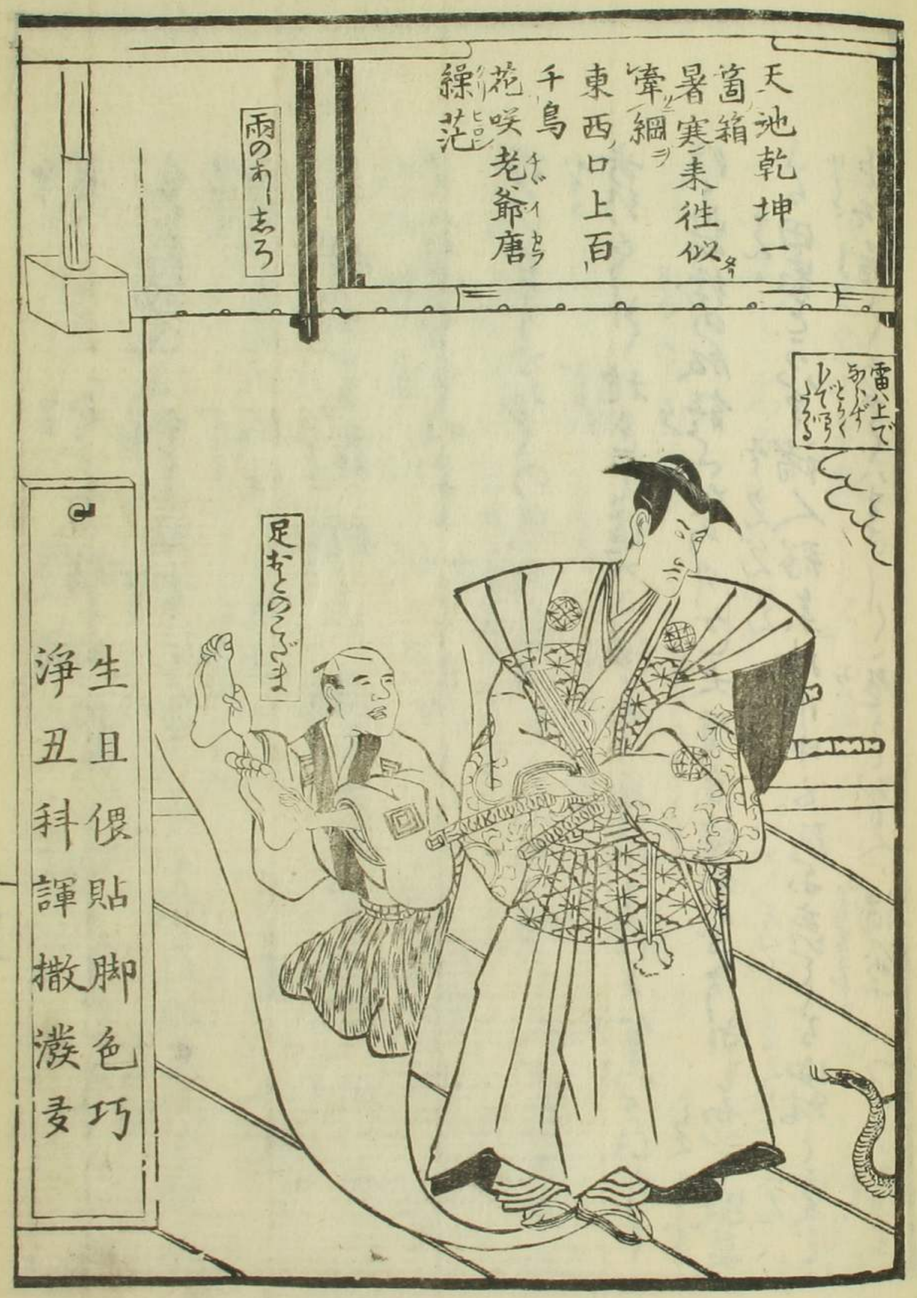
蓋惟ハ芝居三座の社ハ弥印薬師の本地佛ホく浄瑠璃幕

の起ハ城寛永自五の霊場なり。毎當れ焼仮ハ廬生が栗の仮

小笠〻〻く一日に数年を経〻。去ると云れハ秋とこつて。

戯棚脚色圖



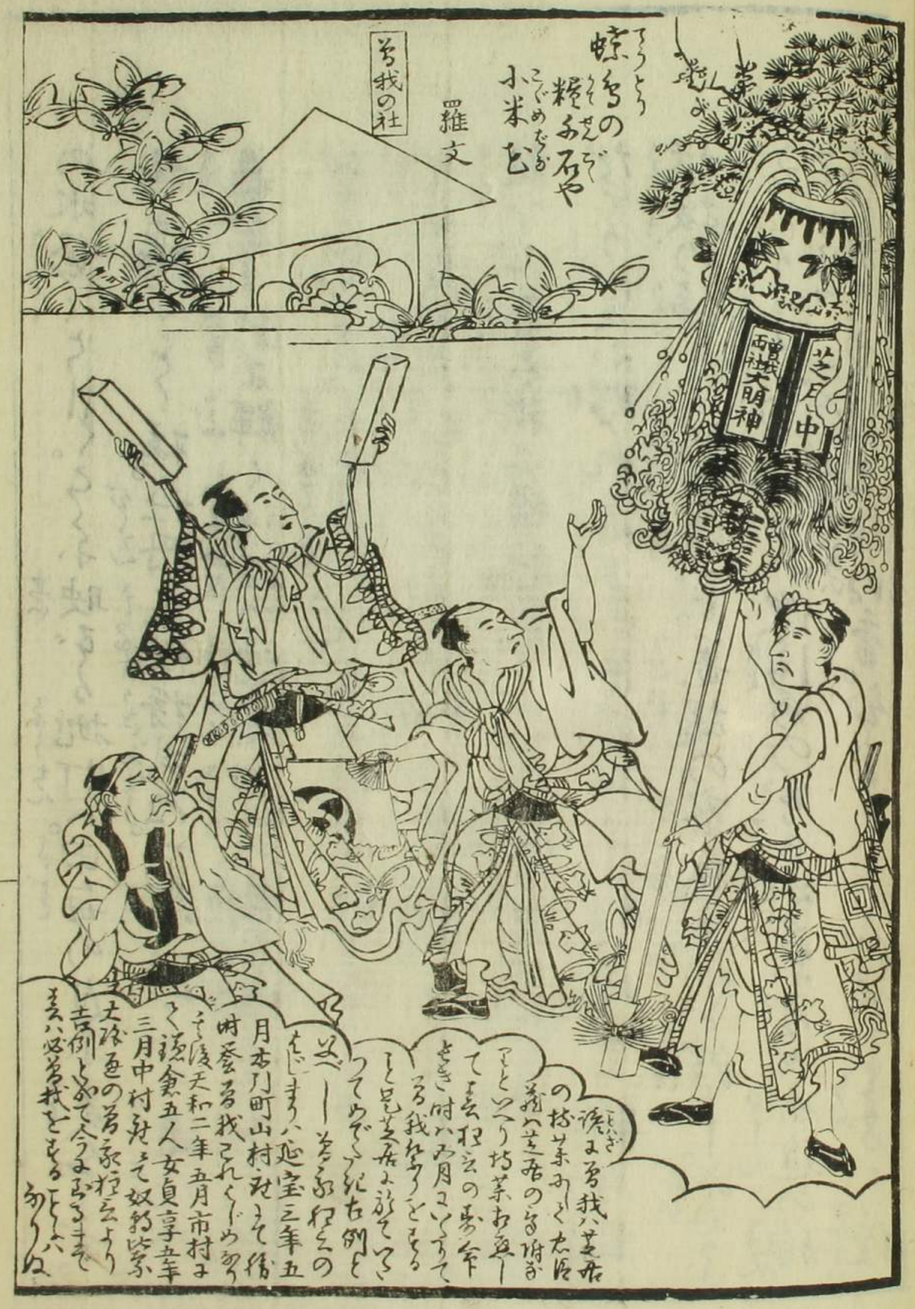


生且偎貼脚色巧
淨丑科諢撒潑妻

夏うとおりくバ雲とゝゐる。梢ハ白ハぬ花を添てゆきとゝぬるゝ枕
云をたづゝ。風雲ゝふぬ雪をゝてゝ雲よりゝれぬ雲を結ふ
白反ハ玉井の細後より車油と流ゝ。月日星ハ竹の簀ゝ天上
ゝりぬゝさゞる。雲ハ絶ゝく海参をゝゞるが如く。浪ハ長し
くゝの雲を立ゝるゝ似ゝゝ。ゝひよくくの名ハ絲の工合ゝ茸
ゝび。ゝゝうごゝくの鬼火最汚臭ゝ。馬ハ潜ぐくゝと云也。牛ハ
歩ゝゝくゝ抱ゝて這入る。張竜の茶碗ゝ云ゝゝゝ
ほゝ出絲の仮結ゝゝたゝゝ大厦高楼のゝゝきゝ忽ち寂莫
ゝる田家とゝゝ諸人雑糸ゝ市中ゝ。孫ゝ歩くゝゝ山林と変ゞ。
下拵居くゝゝくゝハまさゝくゝ巷ゝとゝりくゝ猶ゝゝへゝゝ居。

繻甲ゝ要家くゝゝれバ奥の一間へ毒ゝ人。五人でゝ三人
でゝ。又ゝくゝゝくゝゝゝゝゝ多くゝ。ゝく毛情ハ如ゝゝ。
悪事ゝゝゝけ大声ゝくゝ密ゝゝ布ゝ錦ゝゝ
くゝ忽ち襤褸ゝ尾拇指ゝ枯ゝゝ生死流ゝの捨ゝ。月日
のゝゝ。赤怒哀楽盛衰終一時ゝ争ゝくゝゝ絲ゝ
群集。信ゝ忽ゝ繪ゝゝ或ハゝ。或ハゝ。波怪奥ゝ
あゝくゝゝ。私大ゝゝゝゝ。此地の正月ゝゝ。十月の
朔日ハ別くくの元日なくくゝ周制ゝくくゝゝ。先祖ゝ
その全盛をいくゝ。積あゝゝゝ蓬ゝの山風くくくゝ。
ゝ田の花のくゝを一夜の間ゝ栽くゝ。昼くゝくゝ天水桶

曾我祭禮之圖
上下の麻裃


曾我の社
羅文
芝居中
両社大明神

の水茎とし〳〵こゝに映ずる挑灯は。田毎の月に異ならず。
梅に柳に桜。牡丹立役掾武臣に一度に咲く造化の
幕なし。軒に輝く注抜の燈籠細工は長安城上の春の夜も
おもひ出られ春宵一刻価千金役者の礼者に花ならずして
家迄もの隔たにむらがりて手を拍は。百手の雷も一度に落るかと
疑ふ。一番太鼓二番鶏をまつぞ。三番叟四更の鐘に先
だてり。客に群れ来る茶屋花にのしこたに花に新五鳥。
猿楼の樅て凧を漕ぎ。篭掘の客桟敷に咽を潤し。宵より
ぎろちり小観堂にまる小役者のおくの水。茶屋が寄進の燈
路は虎屋の浦茸にも吸香。春をまくも行いも長き乃経。

功徳は路住の盆正月一夜に来る常しき。桟敷へ百夜参りて
せし利生は目ぐに新なるも更に葬八人の見物にふれてお
を詣もとめ。一ッびこに歩みを運び。是質合卿の小来は癆
痃氣欝の諸病を治し薮入娘の身丈を伸ぎ。鳴手前
といふ狂わ妙とせん狂言一面の不に勤しく。永く三番の千歳
を待ん縁に云。

吁そのむかし天の磐戸 ㊤
松れたてとの色久敷世に

目に正月の花に躍しと ㊦
梅毛のなかく永く待人よ ㊦

戯子名所圖會巻之一 終